

共同研究プロジェクト「タイ文化圏における山地民の歴史的研究」(2008年度第1回研究会)

日時： 2008(平成20)年7月28日(月曜日)午後1時半より午後6時

場所： AA研セミナー室(301)

報告：

1. 共同研究員全員

『叢書：知られざるアジアの言語文化』について

2. 尹紹亭 (AA研共同研究員、東京外国語大学AA研客員教授)

「雨林、ゴム、茶園—雲南西南山地民族の生態史」

3. 渡部武 (東海大学教授)

コメント

研究会開催の趣旨

これまでのプロジェクト研究会報告では、山地民の歴史と社会が主な対象であったが、この度の研究会では山地民の暮らしを支える自然環境の変容について検討することにした。2007年9月から中国の著名な山地民研究者である尹紹亭氏(雲南大学教授)が、AA研の客員教授として来日して、本プロジェクトの主査ダニエルスと雲南西部山地の生態史に関する共同研究を実施している。研究会では尹紹亭氏に共同研究の成果の一端を発表して頂くと同時に、共同研究員全員による『叢書：知られざるアジアの言語文化』シリーズに関する検討を行った。

報告の要旨

1. 『叢書：知られざるアジアの言語文化』について

昨年度において、本共同研究プロジェクトの成果普及活動として創刊した本叢書の第一巻『タイ族が語る歴史—「センウィー王統紀」「ウンポン・スィーポ王統紀」』(新谷忠彦所員訳著)と第二巻『ラフ族の昔話—ビルマ山地少数民族の神話・伝説』(チャレ著・片岡樹共同研究員編訳)が相次いで刊行されたことにより、このシリーズは軌道に乗ったといえる。

それを受けて、今回のセッションでは、先ず本年度刊行予定の『ワ族の昔話』の構成と内容について、担当者の山田敦士共同研究員から報告があった。次に、来年度に向けて翻訳作業を推し進めている清水享・立石謙次両共同研究員から配布資料に基づき、それぞれ「涼山彝族の昔話」と「白族『南詔図伝』『白国因由』」に関する説明があった。共同研究員の樫永真佐夫氏からも、目下準備しているベトナムの黒タイ族資料の和訳を来年度中に刊行したい旨の報告があった。また、新しい企画として、AA研フェローである新江利彦氏からは、ベトナムのチャム族の年代記を翻訳する計画について説明があった。来年度には、清水、立石及び樫永の三共同研究員による和訳を完成させ、刊行することが決定した。

2. 雨林、ゴム、茶園—雲南西南山地民族の生態史

尹紹亭氏は、パワーポイントによるプレゼンテーションを行い、調査データを明示しながら、雲南山地民の伝統生活を支えた焼畑農耕について詳細に分析した。雲南における焼畑農耕の方式とその分布や主要栽培作物を明確にした上で、1950年代から次第に焼畑農耕が減少している事実を踏まえ、焼畑地の利用がどのように変化してきたかなど、その変容ぶりを詳述した。焼畑農耕が消滅した要因として以下の5点が指摘された。

すなわち
(1) 焼畑農耕を原始的な生産方式とみるマルス・レーニン主義、(2) 国家による政策（焼畑農耕を制限あるいは禁止する法律）、(3) 国家による社会主義改造や政治運動などが山地民が依存する焼畑農耕を絶えず直撃した、(4) 人口増加の圧力（山地民の人口は約三倍増加しており、外来移住者の人口も増大している）、及び(5) 市場経済の浸透である。

時系列でこれらの要因を整理すると、以下のような時期区分になる。1950年代においては社会主義改造が、1960～1970年代においては政治運動が、1980年代においては林業政策、1990年代から現在に至るまでは市場経済が、それぞれの時代ごとに大きな影響を及ぼしていた。市場経済の導入がこれまでの焼畑地を果物、茶園及びゴム農園へと変換させたのである。しかし、雲南での経験からゴム農園の造成は雨林を含む生態環境全体にも悪影響を与えていることが鮮明になっている。具体的に言えば、国営及び民営のゴム農園の増大による悪影響は、(1) 生物の多様性が消失し、(2) 水源の枯渇、(3) 乾季における降霧日数の減少、(4) ゴム精製工場から流れ出る廃水による汚染などが挙げられる。また、焼畑農耕という経済基盤の消失に伴い、山地民の固有文化も大きな変化を余儀なくさせられているという現象が起こっている。尹氏は、隣接するラオスやミャンマー北部にも近年ゴムの木栽培が拡大しているが、雨林を含む生態環境全体に悪影響を及ぼすことを危惧しており、ラオスとミャンマー政府関係者にぜひとも慎重に対処して頂きたいという願望表明で報告を結んだ。

(プレゼンテーションは中国語によって行われ、通訳は中央大学院生である西川和孝氏が担当した)

3. コメント・質疑応答

渡部武氏は尹紹亭氏の焼畑農耕研究が学史上において占める位置を評価した上で、シブソンパンナー（西双版纳）のゴム農園の建設が動物にとって生息しにくい環境を作り上げた点を強調した。中国政府がそもそも海南島とシブソンパンナーに国営ゴム農園を設置したのは、1950年代の冷戦時期、欧米諸国の経済封鎖によって海外からの輸入が不可能となった軍需物資と工業原料用のゴムを確保するためであったが、1990年代の市場経済の進展に伴い、自然環境への影響がより深刻になっていると指摘した。

質疑応答では、雲南とベトナムの焼畑、特に焼畑地における樹木栽培について多くの時間が割かれた。また、研究協力者として参加した田畑久夫氏から、焼畑農耕が先か、稲作が先か、また灌漑農法の歴史的出現などについて質問が出され、焼畑農耕起源をめぐる問題について活発な討論が行なわれた。

(唐立)